

では、小児であっても、腸チフス、髄膜炎菌など未承認ワクチンのニーズもある。

P1-16

東京医科大学病院における口腔ケアの現状と課題

(口腔外科学)

○時崎 洋、岡本 彩子、安田 卓史
小泉 敏之、里見 貴史、松尾 朗
近津 大地

口腔ケアは手術前後や放射線・化学療法において術後感染や口腔粘膜の予防に効果があることが広く認識されている。東京医科大学病院歯科口腔外科・矯正歯科（以下当科）ではこれに対して、2010年5月より専門的口腔ケアを実施する口腔ケア外来を開設した。

日本には標準的な口腔アセスメントシートが存在しなかったため評価が困難であった。アメリカではEilers J.の口腔アセスメントシート（OAG）が標準として用いられているが、介入のタイミングの違いなどから日本の医療現場には不向きであった。そこで当科では口腔ケア外来スタッフがOAG東京医大版を作成し院内外に広く発信した。

対象は2010年5月から2012年4月までに口腔ケア依頼を受けた患者426名とした。アセスメントシートを用いて口腔アセスメントを施行し、問題点の抽出およびケアプランを作成した。再アセスメントを施行することで問題点の改善やケアプランの再作成などフォローアップに努めた。当科ではアセスメント点数の変化により効果を評価し、改善を認めた。

2012年2月から口腔ケア専用の依頼状を作成し、医師だけでなく看護師からも依頼が受けられるようにした。入院患者の口腔内の状況は主治医よりも看護師の方が理解していることが多いため、看護師から主治医に口腔ケアの必要性があることを理解させるとともに口腔ケア外来の存在をアピールする目的もあった。また依頼状は記述式ではなくチェック式のため、記載が簡便で依頼目的も明瞭となった。

周術期患者の口腔ケアが推奨されている。当科でも各科と連携し周術期口腔ケアを施行しているが、他科医師の口腔ケアに対する認識の格差、周術期患

者の依頼が遅い、患者自身が口腔ケアの必要性を理解していない、治療計画変更後の連絡不備などが問題点としてあげられた。今後より多くの患者が口腔ケア外来を活用できるような体制を整え、アピールすることが重要であると考えられた。

P1-17

医療面接実習では、実際の臨床現場に基づく振り返りが期待されている

(総合診療科)

○原田 芳巳、平山 陽示、井村 博美
和久田佳奈、大滝 純司

【目的】 本学では医学科4年生の共用試験OSCEの直前に模擬患者（SP）参加型医療面接実習を行っている。少人数グループでの実習で多数の診療科の教員が担当している。我々は、教員の違いによる影響について一連の研究を行ってきた。今回は、教員からの振り返りの差について学生・SPがどのように感じているのかを明らかにし、担当する教員の今後の研修に役立てることを目指した。

【対象と方法】 2011年12月5日～14日に本学4年生123名（16グループ）に実習が行われ11名の教員が担当した。実習では、面接・振り返りの時間はあらかじめ決められていた。実習終了後にSP、学生、教員を対象に、質問票を用いて実習の内容、教員からの振り返りなどについて調査した。また、教員による振り返りを録音して書き起こし、その内容を、positive feedback(P)かnegative feedback(N)か、また「コミュニケーションに関する内容」か「医学的情報に関する内容」かに分類し検討した。

【結果】 教員による振り返りに対するSPや学生からの評価は概ね良好で、グループ間で差はなかった。自由記載では「経験に基づいた振り返りをした」「学生全員に意見を言わせた」など肯定的意見が否定的意見より多かった。また「コミュニケーションに関する内容」が「医学的情報に関する内容」より多く述べられていた。ビデオは15グループについて検討できた。P/Nの比率は0～4.0、また「医学的情報」の割合は9～63%と開きがあり、同じ教員でもグループにより大きく異なっていた。

【結論】 教員による振り返りの内容に最も影響するのは、学生の出来であることが伺えた。SPや学生